歴史地震
第 33 号(2018) 93-101 頁
受付日 2017/11/29, 受理日 2018/04/10

[資料] 『畑屋村震災惨状記』に記された 1896 年陸羽地震の震災の状況と対応について

鏡味 洋史*

秋田大学 地方創生センター† 水田 敏彦

Damage due to the 1896 Rikuu Earthquake Denoted in " Disastrous Records in Hataya Village", a Private Note Archived at the Village

Hiroshi KAGAMI

Ishikari, 061-3214 Japan

Toshihiko MIZUTA

Center for Regional Revitalization in Research and Education, Akita University,
Tegata Gakuen-machi 1-1, Akita, 010-8502 Japan

The 1896 Rikuu earthquake of which magnitude was 7.2 occurred in mountainous area between Iwate and Akita prefectures and caused severe damage in both prefectures. The authors have been continuing literature surveys on damage due to this event and revealed detailed damage distributions and disaster responses by local governments utilizing archived reconnaissance reports, newspapers and local governmental documents at that time. In this paper, we discussed on the damage of small village of Hataya, Akita prefecture through an archived private note in this village. Damage of each building in the village was listed and compered with the data from other documents. Local governmental responses were also traced from a diary on this note.
Keywords: 1896 Rikuu Earthquake, Earthquake Disaster, Literature Survey, Private diary.

§1. はじめに

1896 年(明治 29 年)陸羽地震は岩手県と秋田県の県境で発生した M=7.2 の内陸地震であり両県に被害地域がまたがる. 筆者らはこの地震を取り上げ, 当時の地震調査報告書, 新聞記事, 行政史料, 郷土史料などの文献調査を進めてきた. 最初に被害分布について地震直後の調査報告書を当時の新聞記事で補い岩手県側の詳細被害分を明らかにした[水田・鏡味(2008)]. 秋田県側については地震直後に発刊の『秋田震災誌』[秋田震災救済会(1897)]の記載事項から詳細な被害分布を明らかにし[水田・鏡味(2009a)], さらに人的被害の発生状況を明らかにした[水田・鏡味(2009b)]. 次いで秋田県公文書館に陸羽地震関連の簿冊が保存されていることを見出し, 秋田県を中心とする震災対応を明らかにした[水田・鏡味(2010)]. さらに, 文献調査の範囲を地方の郷土資料館などに広げた. 秋田県美郷町学友館では陸羽地震の写真帳が保存されているのを見つけ, 写真資料から撮影場所を同定し被害の状況を明らかにした[水田・鏡味(2015)]. さらに他の画像資料に範囲を拡げる中 1889 年(明治 22 年)創刊のグラフ誌『風俗画報』[東陽堂(1896)]に陸羽地震の特集があるのを見つけ, 記載の挿絵および記事から場所などを同定し被害の実態を明らかにした[水田・鏡味(2016)].

これらの文献調査を進める中で, 郷土史料館などには当該町村の公文書類の他に個人の日記, 覚書, 手記などが保存されており, 地震に関連する史料として活用できることが分かった. 本論では秋田県美郷町学友館に保存されている『畑屋村震災惨状記』に着目する. これは一個人のまとめた日誌である.

* 〒061-3214 北海道石狩市在住
電子メール: ve3iv6@bma.biglobe.ne.jp
† 〒010-8502 秋田市手形学園町 1-1
電子メール: tmizu@gipc.akita-u.ac.jp

§2. 陸羽地震の概要と畑屋村

2.1 陸羽地震の概要

『日本被害地震総覧』[宇佐美ほか(2013)]のカタログによると本地震の諸元は，発震時 1896 年(明治 29 年)8 月 31 日 17 時 06 分，秋田・岩手県境，λ=140.7° E，φ=39.5° N，M=7.2 である．

図 1 に[水田・鏡味(2008, 2009a)]で求めた被害から作成した震度分布図を示す．また，図中には『日本被害地震総覧』による住居全壊率(40,10,1%)を示している．震度 6 以上の範囲は秋田県仙北郡や平鹿郡東部の平野や山地，岩手県西和賀郡西部となっている．震度 7 の町村は仙北郡の南東部の平野部に広がっており，畑屋村はその中に含まれる．

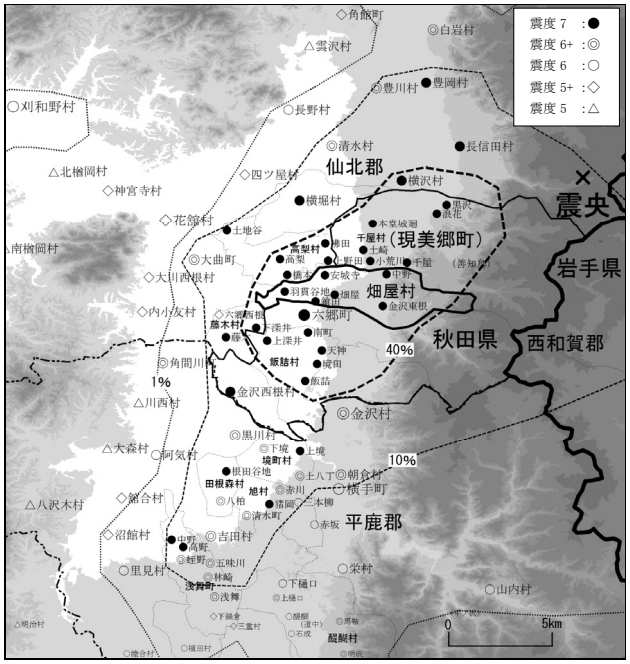

図 1 畑屋村と周辺の被害分布

Fig.1 Damage distribution in and around Hataya village due to the 1896 Rikuu earthquake.

2.2 畑屋村の沿革

畑屋(はたや)村は 1889 年(明治 22 年)の町村制施行で畑屋村，安城寺(あんじょうじ)村，鑓田(やりだ)村，羽貫谷地(はぬきやち)村，金沢東根(かねざわひがしね)村，中野(なかの)村の6旧村を統合して畑屋村が成立した．これらの旧村名は大字として残り，現在に継承されている．1955 年(昭和 30 年)に東隣の千屋村と合併し千畑村となり，2004 年(平成 16 年)の平成の大合併では六郷町，仙南町と合併し新しい美郷町の一部となり，現在に至る．

2.3 陸羽地震での畑屋村の被害

畑屋村を含む現在の美郷町の範囲の地震当時の町村名大字を図 2 に示す．背景地図は 1913 年(大正 2 年)発行の 5 万分の 1 の地形図を用いた．また，これらの町村での被害を[水田・鏡味(2009a)]より抜粋して表1に示す．

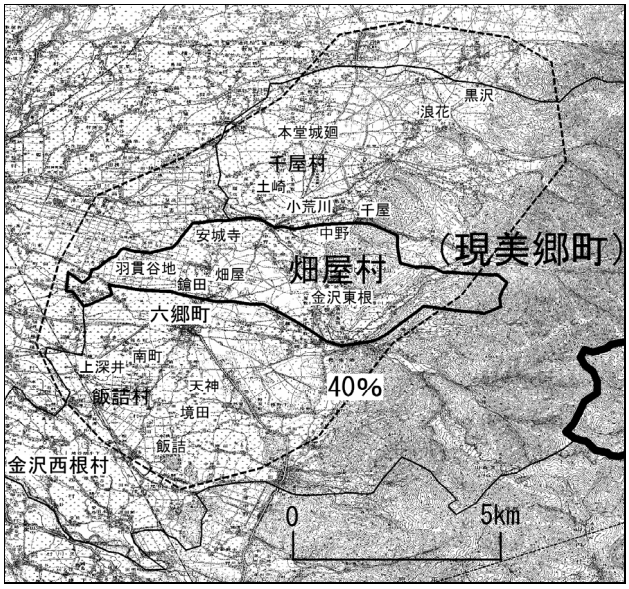

図 2 現在の美郷町の地震当時の町村名大字

Fig. 2. Location map of settlements in the present Misato town territory.

表 1 現美郷町の範囲での被害一覧

Table 1 List of damage in the present Misato town territory

旧町村	大字	全潰/半潰/破損	死/傷	昭和	現
千屋村	千屋	90/ 52/ 10	34/38	千畑村	美郷町
	浪花	77/ 45/ 12			
	黒沢	30/ 13/ 5			
	本堂城廻	57/ 51/ 1			
	土崎	80/ 13/ −			
	小荒川	11/ 11/ 2			
畑屋村	畑屋	83/ 3/ 3	26/69		
	羽貫谷地	25/ 0/ 0			
	鑓田	22/ 1/ 1			
	金沢東根	101/ 33/ 17			
	中野	36/ 3/ 0			
	安城寺	62/ 2/ 2			
六郷町		706/ 129/ 136	23/77		
飯詰村	飯詰	71/ 8/ −	11/83	仙南村	
	境田	28/ 4/ −			
	天神	19/ 3/ −			
	南町	56/ 3/ −			
	上深井	28/ 2/ −			
金沢西根村		145/ 45/ 223	6/13		

§3.『畑屋村震災惨状記』

3.1 原典及び二次史料

美郷町学友館に『畑屋村震災惨状記』と題する謄写印刷の冊子を見つけた．整理の袋の上書きには「我村の歴史　第49号　深澤多市　原著　本間喜一郎　鉄筆」とある．『我村の歴史』は秋田県立図書館に所収されており第1号から17号まで1923年（大正12年）から1924年（大正13年）にかけ刊行され，カタログ化されている．これとは別に第19号大正12年（1923）の冊子があり『畑屋村震災惨状記』が所蔵されている．美郷町学友会館所蔵のものと同一で，袋書の第49号は第19号の誤記と思われる．図3に表紙，本文の冒頭部分を示す．

畑屋村が東隣の千屋村と合併した千畑村の時代の1986年（昭和61年）刊行の『千畑村郷土誌』[千畑村郷土誌編纂委員会（1986）]の第6章備忘録に陸羽地震の記載があり，その一節に『畑屋村震災惨状記』の紹介があり抄録されている．また，隣県の岩手県沢内村では地震の100周年を機に地震史料『地底咆哮から百年（陸羽地震と川舟断層の記録）』[沢内村教育委員会（1996）] をまとめており，『畑屋村震災惨状記』を紹介し，『千畑村郷土誌』から転載している．

3.2 著者及び原著者

著者は深澤多市であり，内容は友人であった高橋石五郎の遺稿をまとめたものである．深澤多市は前述の『千畑村郷土誌』に経歴が紹介されている．主な経歴を抜き書きし以下に示す．

1874(明　7)年　仙北郡金沢東根村生まれ
1893(明26)年　上京し二松学舎に入学，漢籍を学ぶ
1895(明28)年　秋田歩兵連隊に入隊，日清・日露戦に従軍除隊後，畑屋村書記，仙北郡役所，宮城県吏員を歴任
1919(大　8)年　京都府熊野郡長
1921(大10)年　帰郷，郷土史研究に専念
1922(大11)年　自宅の失火により古文書記録等焼失
1923(大13)年　畑屋村の郷土誌『我村の歴史』発刊
1925(大14)年　横手町助役
1928(昭　3)年『秋田叢書』発刊
1934(昭　9)年　病没

没後50年を記念し1983年（昭和58年）に千畑村金沢東根仏沢公園に顕彰碑が建てられた．公園は現在美郷町となっており，2017年（平成29年）に現地に赴き撮影した顕彰碑の写真を図4に示す．

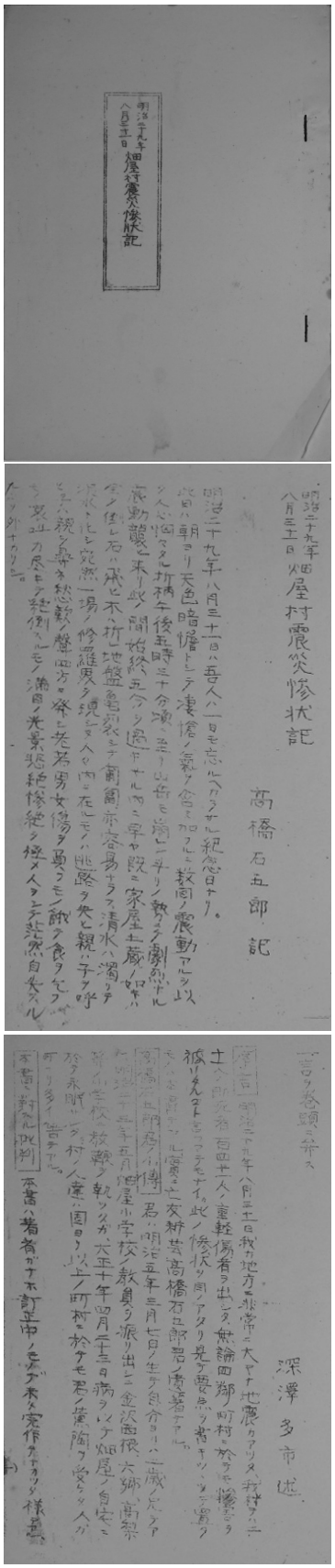

図3　畑屋村震災惨状記の表紙，冒頭部分
Fig. 3. Cover and top pages of “Disastrous record of Hataya village”.

図 4　美郷町仏沢公園の深澤多市の顕彰碑
（2017.9.14 水田撮影）
Fig. 4. Monument of Taichi Fukasawa, the author of this note, built at Hotokesawa park in Misato village (photo by T. Mizuta).

一方，原著者の高橋石五郎は畑屋小学校勤務であり，出版のいきさつが本文の序文に詳述されているので後述する．

3.3 序文

本報告は謄写印刷されたものを綴じた小冊子で頁は付けられていない．巻頭に「一言巻頭に弁す」と題する深澤の序文が載せられている．節は設けられていないが［　　］で囲った見出しが付けられている．以下見出しに沿って内容を紹介する．

［序言］

本書の概要を述べた短い文であるので全文を引用しておく．「明治 29 年 8 月 31 日我が地方に非常に大きな地震があった，我村では 21 人の即死者 141 人の重軽傷者を出した，無論四隣町村に於ても惨害を被りたること言ふまでもない．此の惨状を目のあたり見て要点を書きつつで置いたものは本書である，実に亡友耕芸高橋石五郎君の遺著である」．

［高橋石五郎君の小伝］

原著者高橋石五郎の経歴を記したもので箇条書きにすると，

1872(明　5)年　出生（深澤の 1 年上）
1890(明 23)年　畑屋小学校の教員を振出に金沢西根，六郷，高梨等の小学校に勤務
1921(大 10)年　畑屋の自宅に於て永眠

［本書に対する批判］

本書は処々に書入があるなど著者がなお訂正中のもので未だ完作でなかったことを述べ，「本書は完作ではないが兎に角首尾なる一篇の記録として書て置かれた点だけは，君の様な注意深い人でなければ出来ないことであった」としている．また「筆者は当時畑屋小学校に在勤したと云ふことで，記事は其の周囲に密にして他の方には粗であると言われしは或は此の点に遺憾がないものでもない」と対象地域の片寄りのある事に言及している．

［本書発行の理由］

著者の早世した親友，藤岡良之助と高橋石五郎の二人をあげ，藤岡には『畑屋村地誌』と題する一書があり，高橋には本書があることを最初に述べている．

1922 年（大正 11 年）の自宅の火災で図書，記録類を全て失い，これを機会に「一ケ所に蔵置せず数十百ヶ所分蔵に置くことに気がついた．これには謄写版と云ふ軽便な複写器があるそして昨年から色々なものを摺り上げてある．本書も無論その一つである」としている．

［我家の被害］

陸羽地震の時の体験談であり，自宅の被災の様子を詳細に述べているので全文を引用しておく．「此の地震のときは自分は青森歩兵第五連隊第九中隊にあった，此の日戦友等と共に夕食を喫し面桶を洗浄すべく満水の入盥の前に立てありしに大地震で盥の水は東に西に溢し出つるを見た，当時何とも思はなかったが翌日になって秋田仙北の震災を報じて来た，後数日許可を得て臨時帰省して見たらありし我家は全く取り払はれ僅に水屋と土蔵とを利用して家族の住居となしてあつた，附近一円原形を留めてなく，惨状目も当てられぬ有様であった当時厳父慈母の語る処に因れば地震のときは母方の老祖母が来泊されてあった，この突差大地震に老祖母及び母と妹のハル子が通路を失い屋内に喚き叫んで居るうちに家屋は倒潰して了つた，宅地に隅々よりは噴水の如く泥土が湧き出たと云ふ有様である．父は外より呼びつつ漸くにして三人のありかを尋ね当て倒れたる家の欄間より引き辷り出したと云ふことである．幸いに怪我の無かったのは天佑である．斯うした惨話は村内毎戸にありしと思はる」．

歴史の教訓

昨年の東京の大地震，すなわち 1923 年(大正 12 年)関東大震災を例に「或る歴史家の昨年の東京の大地震後に言うた事に安政年度の江戸の大地震があれだけ苦い経験はよい教訓を与へて置たに拘はらず，此の度の地震の結果から見ると何等此の教訓を遵奉して居ない」と過去の地震の教訓が重要であると述べている．

村内の諸君に希望

「特に予は村内の諸君に希望する」とし，「家屋の構造にしても用水溜の築造にしても幾多の教訓は歴史記録に依りて伝へられているのである．それから天災地変に遭遇した人達はこの惨状と之に対する感想とを自己の胸中にのみ秘め置かずに之を文字につづりて後世の人達に教訓にて置くことである，予輩は高橋石五郎君の遺著たる此の震災惨状記を以て完全のものにあらずとするに拘はらず，特に之を乞ふて複写し村内の諸君に示さんとしたのは一つはこれが為である」と希望を述べている．

本書の附録に就て

付録の被害表について「役場の公文書に依り自分が之を補録したものである」とし，さらに役場には当時の震災救助に対する書類は一括して完全に保存されていることを述べ「自分も適当の時に之を調査して，更に一部の震災史を書いて見ようと思ている」としている．また，山崎理学士，泉尾農学校長，巨智部忠承，中村達太郎らの報告書も付録として掲載したかったが果たせなかったとしている．

結語

最終に「記述の本文に関しては全く誤謬なりと認むるものを二三訂正した外全く原本の通であることである」と述べ原著者の意思を尊重したことを表している．最後に，謄写原紙の調達遅れから本月号の休刊，古い原紙を用い不鮮明となった本号外を詫びている．

3.4 畑屋村震災惨状記本文

序文の後に始まる本文であり，「明治二十九年八月三一日畑屋村震災惨状記　高橋石五郎　記」のタイトルが付けられている．

書き出しは，「明治二十九年八月三十一日は吾人は一日も忘るべからざる記念日なり」で始まり，地震発生時の状況描写に続く．「此日は朝より天色暗澹として凄愴の気を含み加えふるに数回の震動あるを以て人心恟々たる折柄午後五時三十分頃に至り山岳も崩れん斗りの勢にて激烈なる震動襲い来り此の間終始五分を過ぎざる内に早や既に家屋土蔵の如きは全く倒れ石は飛び木は折れ地盤亀裂して匍匐亦容易ならず清水は濁りて泥水と化し突然一場の修羅界を現しぬ人々内に在る者は逃路を失い親は子を呼び子は親を尋ね愁嘆の声四方に発し老若男女傷を負うもの餓て食を乞ふ者，哀叫力尽きて絶倒するもの満目の光景非絶惨絶を極め人をして茫然自失するの外なかりし」．

「一瞬間にして全村を崩潰し老幼援助避難するの遑なく多くは崩壊後辛ふして逃去せり内に土蔵剥落の土又は梁柱壁挟せられ他の援助によりて漸く一命を拾ひ得たるもの数多あり憶如何に周章狼狽の為せしことよ殊に晩餐の時刻とるを以て炎々たる炉火を消えしむるの暇なく火災に罹りしものさへあり其の惨状口之を言う能はず筆之を筆する能はす画之を写す能はず実に凄愴酸鼻に堪へざりしなり」．

次に，村役場，駐在所，学校，社寺，民家の具体的な被害について詳述されている．被害の内容については次章で他の文献とも比較して議論する．

次に地震後の対応について記されている．負傷者の救護については駐在所前に仮病院が開設されたこと，田畑の荒廃で収穫が 3,4 割減ずること，貧民救済策が取られたことが述べられている．

9 月 10 日の時点の被害調査で，圧死者 21 名，重傷者 10 名，軽傷者 69 名，全潰家屋 394 戸　同土蔵 5 棟，半潰家屋 44 戸半潰土蔵 2 棟をあげている．最後に本村罹災救助として金品の寄贈について述べられている．

3.5 震災後の日記

9 月 1 日以降の日記が綴られており 12 月 15 日まで続いている．整理して表 2 に示す．記事のない日は省略したが天候のみの記載がある．

日記の途中に次に掲げる新聞記事，報告書などが引用されている．

○山崎理学士の震源談(9/20 秋田魁新報)
○地震を前知するの法に付き古来の実験(9/27 魁)
○故大学教授関谷理学博士地震後の心得
○9 月 28 日震源をして出張したる尾泉本県簡易農学校長及び池辺大曲警察署長の取調べたる状況

3.6 附録

深澤多市補録となっており「最も正確なりと認むる公文書より左に抽出して参考とす」としている．掲載されているのは村全体の被害統計で，即死者 20 名の

表 2　震災後の日記

Table 2. Diary after the earthquake occurrence

月日	天気	記事
9 月　1 日	晴天	此日は茫然自失為め処を知らず
9 月　2 日	晴天	参事官松田啓太郎郡長畑千代記及び憲兵4名来り救護の策を講ぜり
9 月　3 日	好天気	此日は日本赤十字社員特業医学士正八位秋山勇之助看護婦2名を率い出張せるを以て巡査駐在所の門前に仮病院を設て医療に従事せしを以て大に負傷者に便利を与えたり開け行く御代のいといとありがたきにこそなり. 秋田県警察部長田中義達, 池辺大曲警察署長, 阿部郡書記, 秋田新聞記者片岡佐一郎遠藤郡書記, 渡辺赤十字社員等来る.　近藤秋田県巡査補助の為本日畑屋村駐在所へ参りたり.
9 月　4 日	晴	大曲村榊田清兵衛下川六郷警察署長来る
9 月　5 日	雨天	深沢賢治郎, 秋田県参事員横山勇喜震災視察として来る
9 月　6 日	雨天	一般の人の困難云はん方なし, 榊田県会議員及大久保県参事員来る
9 月　7 日	雨天	平山秋田県知事畑仙北郡長中田県属来る, 村山県会議員小川郡書記も来る
9 月　8 日	大雨	畑山県会議長震災視察として来る
9 月　9 日	快晴後雨	長瀬巡査部長来る, 加賀谷仙北郡視学も来る
9 月 10 日	雨	秋田県収税族某善知鳥及無沢の湖水の堤防視察として参りたり
9 月 11 日	曇天	此日内務省書記官太田峯三郎震災視察して畑仙北郡長, 伊藤大日向の諸県会議員及び六郷警察長等と来り暫時休憩千屋村へ参りたり
9 月 12 日	大雨	天皇皇后両陛下は此度の震災を御聞食遊ばされ特に侍従差遣の旨仰せ出さる. 天皇皇后両陛下には此度の震災に大御心を悩まし給ひ侍従を下し給ひて模様など御下問あらせるる趣仰せ出さるいかに陛下が民草にそそき給ふ恵の露の深きよ, これにつきても吾等は君の為め国の為めに身をすつるの心ゆめ忘るへしや
9 月 13 日	曇天	憫然に思召され聖上皇后両陛下より金 5000 円下賜せらる
9 月 14 日	小雨	桧垣本県書記官震災視察として出張あり加賀谷仙北郡視学高垣保吉等も同行せり. 秋田県技手佐野多一郎道路橋梁視察として来る. 秋田耶蘇学校生(仏蘭西人)も駐在所の門前を通行せり.
9 月 17 日	晴天	本県連隊区より震災視察並に見舞として勲八等栗谷四郎参り軍籍にあるものにして震災に罹りたるものに就き見舞いせり
9 月 20 日	小雨	秋田魁新報記者香峯居士山方石之助震災視察として参りたり
9 月 21 日	晴天	救助金 1095 円(食料)郡役所より下付に付き下渡
9 月 22 日		勅使として片岡侍従県下震災視察として本村に御巡回あらせる, 平山本県知事秦仙北郡長, 池辺大曲警察署長, 坂本, 沼田の両代議士, 斎藤先きの代議士, 榊田, 小西, 伊藤の三県会議員及竹村治左衛門, 本村にては深田, 田口, 深沢及役場員等なりき.
9 月 25 日	晴天	震災に罹りたる学校改築費補助金の義に付き秋田県属佐藤宇一郎技手富田喜久二出張せり
9 月 27 日	晴天	本日午後三時頃強震あり　震災地実況視察として宮内顧問官兼有栖川宮別当従三位勲一等子爵山尾庸三及内匠頭正四位勲三等堤正誼出張随行三人其他加賀谷郡視学京野町長も同行せり. (同寮技師樋口正峻, 同技手足立鳩吉)　震災地学事視察として秋田県尋常師範学校長奥田教吉出張せり
9 月 28 日	晴後曇天	震災視察として秋田県雇金崎武司出張せり　本日午後5時強震あり
9 月 29 日	晴天	本日午後 4 時頃強震あり
10 月　1 日	晴天	畑屋尋常小学校潰跡片付
10 月　3 日	曇天	奥山助役は郡長の呼出しに付き村長代理として高橋収入役は地租送納御用にて大曲へ出張, 午後 5 時頃小雨
10 月　4 日	晴	前日大谷派本願寺慰問使来る　午後4時頃鳴動あるや直ちに少震あり
10 月　5 日	曇天	午後3時 30 分より雨, 午後2時強震あり
10 月　6 日	曇天	午前2時強震あり
10 月 10 日	曇天	赤十字社医員六郷より引揚げたり
10 月 11 日	曇天	山本仙北郡書記来る
10 月 12 日	曇天	震災地調査として大蔵省鯨井益太郎秋田収税長下坂藤太郎大曲収税署長長島勝出張せり
10 月 15 日	大雨	震災地学事視察として秋田県属古沢義三郎来る, 高橋亀蔵より酒5升役場員駐在所員へ慰労として送らる, 六郷町浄光寺に震災死亡者追善会あり
10 月 20 日	晴天	小屋掛料本日より下渡せり
11 月　2 日	曇天	文部由布参事官学事視察として臨場古沢県属加賀谷郡視学随行
11 月　5 日	雨風	小震あり
11 月　6 日	晴	鳴動あり
11 月　9 日	雪	初雪積もること 3 寸　震災あり？
11 月 10 日	雪	強震午後 8 時頃にあり
11 月 13 日	晴	鳴動あり
11 月 14 日	晴	本日の新聞に畑屋村近事記載あり
11 月 16 日	晴	鳴動 2 回あり
11 月 18 日	曇天	午後 11 時へ鳴動あり
11 月 20 日	雨	鳴動午後 2 時にあり
11 月 24 日	晴	午前 6 時頃震動あり
11 月 26 日	雨	鳴動 2 回あり
11 月 29 日	晴	午後 10 時 30 分頃強震あり
12 月　1 日	雪	午前 5 時強震
12 月 14 日	雨	午前 4 時頃強震
12 月 15 日	雪	午前 1 時頃震動

名簿が掲載されている．項目は，大字，番地，戸主名，続柄，即死者姓名，生年月日である．

震災被害調査表は人畜被害・建物被害，道路・橋梁等，田畑の被害が 3 分して掲載されているが，これらをまとめ表 3 に示す．

表 3　附録　震災被災調査表

Table 3. Appendixes: Summary of earthquake damage

人		家畜		家屋				損害見積価格
死	傷	死	傷	全潰	半潰	破損	計	
男 7	男 51	馬 34	馬 8	家屋 337	家屋 45	家屋 53	家屋 435	382,500（円）
女 14	女 90	牛 ―	牛 ―	其他 34	其他 28	其他 44	其他 106	

備考：負傷者人員中男 14 人女 13 人合計 57 人の微傷者を含む

道路		橋梁		堤防		石垣	電柱	山崩	
個所	間	個所	間	個所	間			個所	間
2500	16000	30	50	10	60	1	8	1	1800

	田	畑	宅地	山林	計	損害見積価格
個所	780	605	359	25	1,769	
面積（坪）	753,781	6,285	81,104	20,290	861,460	91,984（円）

§4. 考察

4.1 被害

個別の建物被害について『畑屋村震災惨状記』に記載の内容を他の報告書さらに新聞記事を参照して表 4 にまとめた．また，図 5 は表 4 に現れる畑屋村内の建物分布図である．役所・学校を●，社寺を▲，民家を◎で示している．

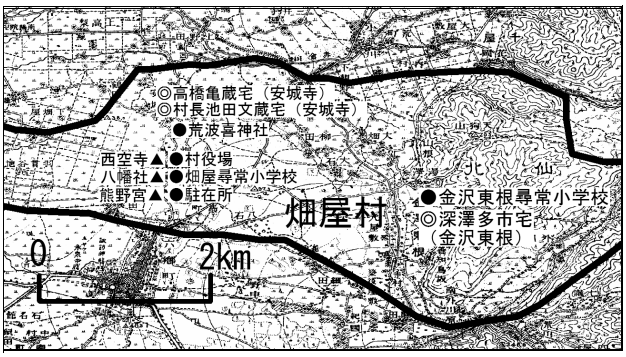

図 5　畑屋村内の被害建物分布

Fig. 5. Distribution of damaged buildings in Hataya village.

4.2 地震後の対応

前章で作成した表　2　の震災後の日記をもとに，来訪者に着目し，分類して表 5 にまとめなおす．国の機関は内（内務省），宮（宮内省），蔵（大蔵省），文（文部省），連（連隊）の略号で示した．国・県・郡・の来訪

表 4　畑屋村内の建物被害

Table 4. List of building damage in Hataya village

		畑屋村震災惨状記	秋田震災誌	風俗画報	秋田日日新聞（発行日）	秋田魁新報（発行日）
役所・学校	村役場	非常の破壊	壁落ち柱折れ全屋傾斜大破損，臨時小屋にて事務	壁落ち柱折れ全屋傾斜大破損，臨時小屋にて事務	壁落ち柱折れ全屋傾斜大破損，臨時仮小屋にて事務(9/6)	非常の破壊(9/13)
	巡査駐在所	非常の破壊				非常の破壊(9/13)
	畑屋尋常小学校	非常の破壊，全部破倒，御真影無事	小使室以外大崩壊平蜘蛛の如し	小使室以外大崩壊平蜘蛛の如し	小使室以外大崩壊平蜘蛛の如し(9/6)	非常の破壊御真影無事(9/13)
	金沢東根尋常小学校					非常の破壊(9/13)
社寺	八幡社	非常の破壊				全潰(9/13)
	熊野宮	非常の破壊				全潰(9/13)
	西空寺	非常の破壊	本堂付属建物崩壊	本堂付属建物崩壊	本堂付属建物崩壊(9/6)	全潰(9/13)
	荒波喜神社					全潰(9/13)
民家	高橋亀蔵宅	地盤亀裂 4-5 尺 泥水噴出 2-3 尺 浸水		家屋崩壊		地盤亀裂 4-5 尺 泥水噴出 2-3 尺 浸水
	村長池田文蔵宅		崩壊，土地陥落		崩壊，土地陥落(9/6)	地盤亀裂 4-5 尺 泥水噴出 2-3 尺 浸水
	深澤多市宅	倒壊，隅々より噴水，泥土				

者を○，◎（複数人）で示した．特記の欄にはその他の来訪者，来訪の目的などを記した．地震の欄には，余震などの記載を記した．

地震の発生は 8 月 31 日であるが日記の記載では翌々日の 9 月 2 日からであり，郡長を含め県郡による救護策がまず取られている．9 月 3 日には日本赤十字社の医師看護婦が到着し駐在所門前に仮病院を設けて医療を開始している．これは 10 月 10 日まで続けられている．県知事の訪問は 9 月 7 日である．

9 月 10 日には県による堤防の視察，9 月 11 日には内務省による視察が行われており，9 月 22 日には勅使の視察があり県知事始め多くが参加している．10 月 12 日には大蔵省による税務関連調査が，11 月 2 日には文部省視学官による学事視察が行われている．

見舞い関係では 9 月 17 日に連隊区より軍籍にあるものへの見舞いがなされ，10 月 4 日には本願寺の慰問が行われている．10 月 15 日には六郷町浄光寺で追善会が行われている．

地震の欄は，余震関係の記述を本（本震），強（強震），小（小震），鳴（鳴動）で記す．余震と思われる強震は 9 月 27 日から記載があり 11 月以降は地震の記載のみである．

5. むすび

小論では秋田県美郷町学友館に保存されている『畑屋村震災惨状記』を読み解き，旧畑屋村における震災の状況，地震後の対応等をたどった．被害の集中した地域に位置する一小村であるが，村での状況を細かに知ることが出来た．特筆すべき主な項目として以下があげられる．

1)原著者の高橋石五郎は地元の小学校教員であり村の文書などを参照し，詳細な日記を残している．

2)編者の深澤多市は青森の連隊で地震に遭遇している．青森での体感から帰郷，自宅の被害について詳細な記載があり他の報告書にはないものである．

3)日記の中では村への来訪者を克明に記録している．災害対応の実態を時系列で追うことが出来た．

序文の「本書の附録に就て」の説明の中で「役場には当時の震災救助に対する書類は一括して完全に保存」されていることを述べている．今後これらの史料の発掘に努めていきたい．また，来訪者の視察内容の詳細やその後の状況についても引き続き文献調査を進めて行きたい．

表 5　地震後の対応の一覧
Table 5. List of daily disaster responses after the earthquake occurrence

月/日	訪問者							その他（特記事項）	地震
	国	県				郡			
	内務省	県知事	県属	警察	議員	郡長	郡属		
08/31								地震発生	本
09/01								茫然自失	
09/02			○			○		救護策	
09/03				◎			◎	日赤仮病院	
09/04				◎					
09/05			◎						
09/06			○		○				
09/07		○	○		○	○	○		
09/08					○				
09/09				○			○		
09/10			○					堤防視察	
09/11	内			◎	◎	○		内務省視察	
09/13								両陛下下賜	
09/16			◎					道路視察	
09/17	連							軍籍者見舞	
09/20								魁記者視察	
09/22	宮	○		○	◎	○		勅使視察	
09/25			◎					学校改築補助	
09/27	宮						◎	宮内省視察	強
09/28			○						強
09/29									強
10/01								畑屋小潰片付	
10/03									
10/04								本願寺慰問	
10/05									強
10/06									強
10/10								日赤六郷引揚	
10/11							○		
10/12	蔵						◎	大蔵省調査	
10/15							◎	六郷町追善会	
10/20								小屋掛下渡	
11/02	文							学事視察	
11/05									小
11/06									鳴
11/10									強
11/13									鳴
11/16									鳴
11/18									鳴
11/24									震
11/24									鳴
11/29									強
12/01									強
12/14									強
12/15									震

謝辞

美郷町学友館の塙観量上席主査には『畑屋村震災惨状記』の所在と貴重なご助言を頂いた。また，査読をしてくださった匿名査読者と編集担当の加納靖之氏から有益なご意見を頂き，本稿の内容を改善することができました．記して謝意を表します．

対象地震:1896 年陸羽地震

文 献

秋田震災救済会，1897，秋田震災誌，169pp.

深澤多市，1923，明治 29 年畑屋地震惨状記，我村の歴史，19，44pp.

水田敏彦・鏡味洋史，2008，1896.8.31 陸羽地震の岩手県における被害に関する文献調査，日本建築学会技術報告集，14，28，665-668.

水田敏彦・鏡味洋史，2009a，1896.8.31 陸羽地震の秋田県における被害分布に関する文献調査，日本建築学会技術報告集，15，30，597-600.

水田敏彦・鏡味洋史，2009b，1896.8.31 陸羽地震の人的被害に関する文献調査，日本建築学会技術報告集，15，31，963-966.

水田敏彦・鏡味洋史，2010，1896.8.31 陸羽地震の秋田県における震災対応に関する文献調査，日本建築学会技術報告集，16，34，1207-1210.

水田敏彦・鏡味洋史，2015，1896.8.31 陸羽地震の写真資料に関する文献調査，日本建築学会技術報告集，21，49，1315-1318.

水田敏彦・鏡味洋史，2016，1896.8.31 陸羽地震による各町村被害状況に関する風俗画報からの文献調査，日本建築学会技術報告集，22，50，373-376.

沢内村教育員会，1996，地底咆哮から百年（陸羽地震と川舟断層の記録），沢内村郷土史シリーズ，14，43-45.

千畑村郷土誌編纂委員会，1986，千畑村郷土誌，896-900.

東陽堂，1896，秋田県下の震災，風俗画報臨時増刊，124，25-43.

宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子，2013，日本被害地震総覧，東京大学出版会，236-239.